

「世論」と向きあう人びと

平林 紀子（埼玉大学）

私と「世論」研究との関わりには、二つの出会い、二つのターニングポイントがあった。

ひとつは、早稲田大学大学院で政治学を専攻しつつ、東京大学新聞研究所（当時）の児島和人先生の「世論」ゼミに参加する機会を得たことである。それは通算8年にも及び、ゼミのテーマともいふべき「世論研究の理論と経験的アプローチの統合」は、世論研究を超えて、学問に対する姿勢そのものとして私の中に刻み込まれた。このゼミでのインターディシプリナリーな交流、現在世論研究の第一人者として活躍されている先生方との出会いを通じて、デモクラシーの現実態を見るという私自身のテーマは具体的な輪郭を得た。

生きたデモクラシーのプロセスとしての「世論」をつかまえるための、知的鍛錬の場と希有な機会を与えてくださった児島先生はじめ諸先生方、学級の友人たちに、この場を借りて深く感謝したい。

もう一つは、ごく最近の話である。94年に現職を得たのち、世論も含めた政治コミュニケーション、とくに選挙や政権運営の戦略的側面に関心をもち、1999年11月から1年半フル

ブライツ研究員として、ハーバード大学とジョージワシントン大学で2000年大統領選挙キャンペーンを研究する機会を得た。この間、各陣営や政党で世論調査を担当する多くの戦略家たちと出会った。日本はもとより米国ですら、政治コンサルタントの仕事は十分に理解されているとは言いがたく、“荒稼ぎする選挙屋”といった悪いイメージが付きまとう。しかし最も印象深かったのは、彼ら世論調査家たちが、選挙に勝つだけでなく、有権者により近い、有権者の理解と賛同を得られる政治のあり方を実現したいと願い、そのための技術をもつ自らの仕事に、誇りと使命感をもっている点だった。彼らは実際には科学の名を借りた汚い手も使うのだけれど、それもまた米国デモクラシーの現実の一側面。実務家として「世論」と向き合う彼らの仕事ぶりに、非常に興味をそそられたのだった。

スタンスも目的も違うけれど、真剣に世論と切り結ぶこれらの人々との出会いを通じて、世論は私にとって逃れられないライフテーマになってしまったような気がする。